

俳僧一具庵一具

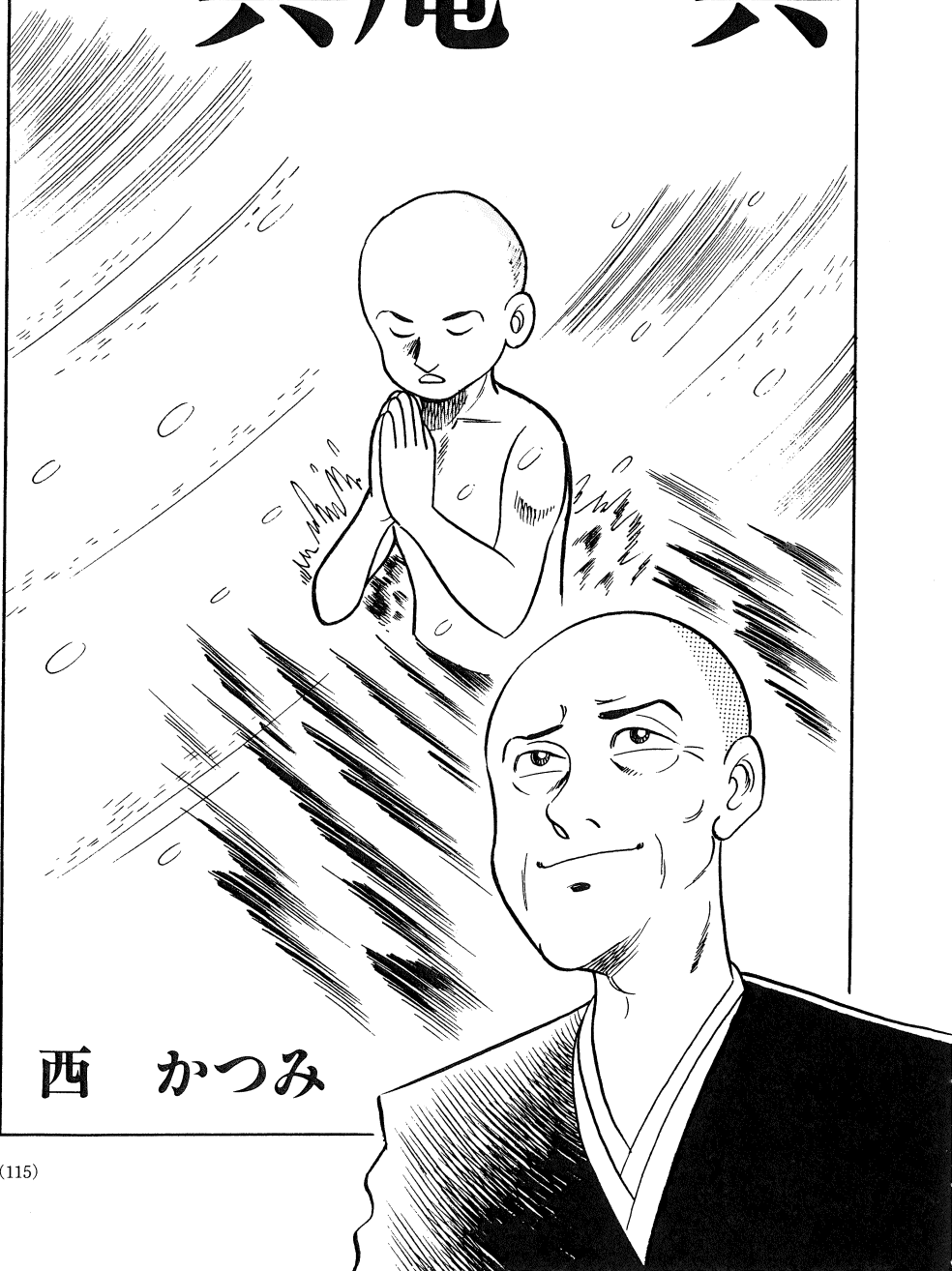
西 かつみ

いわき市平にある専称寺は、応永二年（一三九五）に開基された古刹で、現在その境域は指定の史跡になっています。また、境内には多くの梅の木が植えられ、開花期には、多くの人々で賑わいます。

この専称寺で修業をした僧侶のひとりに、一具庵一具というお坊さんがいました。そして、その一具は、すばらしい俳句をたくさん作ったのです。

俳僧

一具庵一具

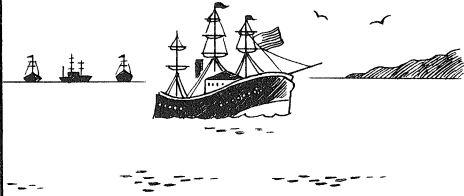


西 かつみ

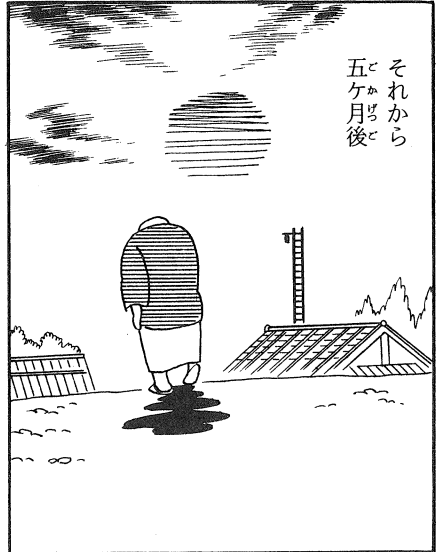
嘉永六年六月三日
ペリー提督率いる黒船四隻が
突如姿を現した。



徳川幕府に通商交を迫り
ラチがあかぬとみるや
「翌年再び来航する」と半ば
おどして去ったのが
その九日後。
あっという間にこのニュースは
全国津々浦々に伝わり
日本中が上を下への大騒ぎとなった。

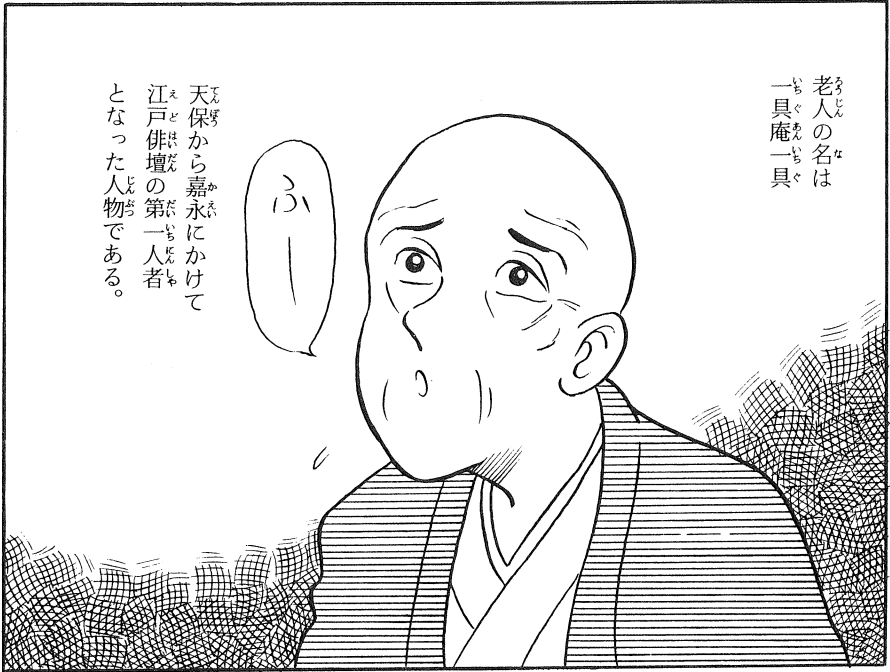


それから
五ヶ月後



暮れなずむ通りを歩く
一人の老人がいた。

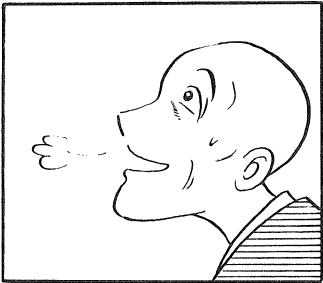




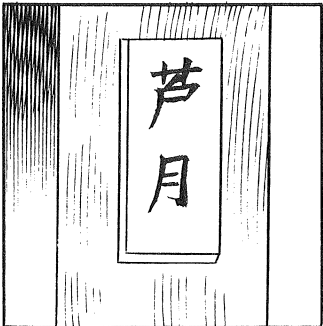
老人の名は
一具庵一具

天保から嘉永にかけて
江戸俳壇の第一人者
となった人物である。

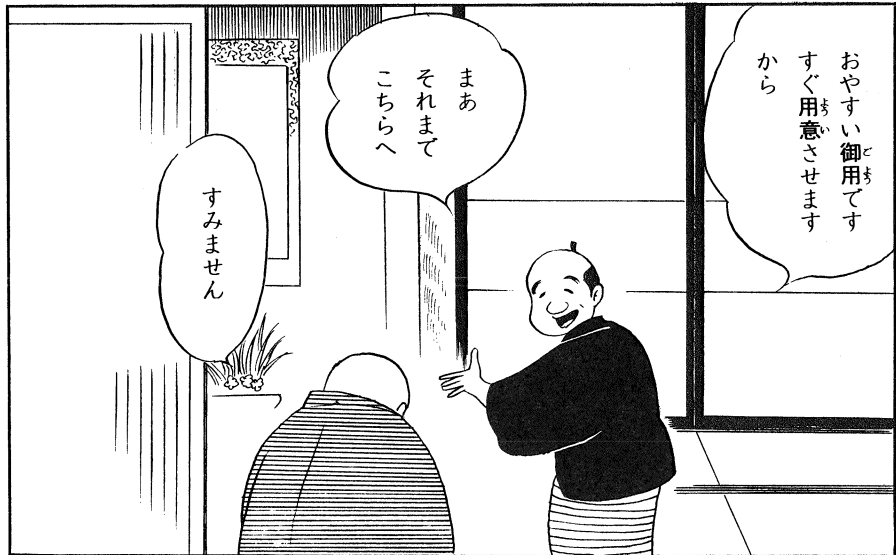
ふ

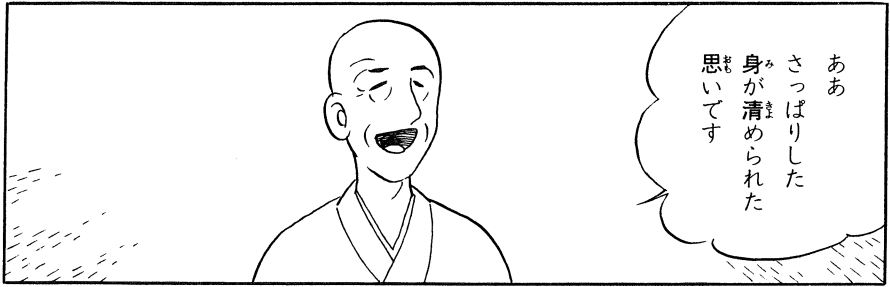


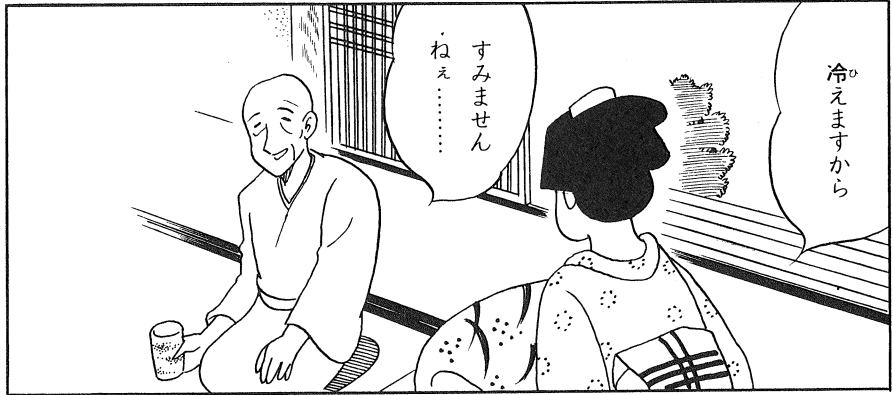
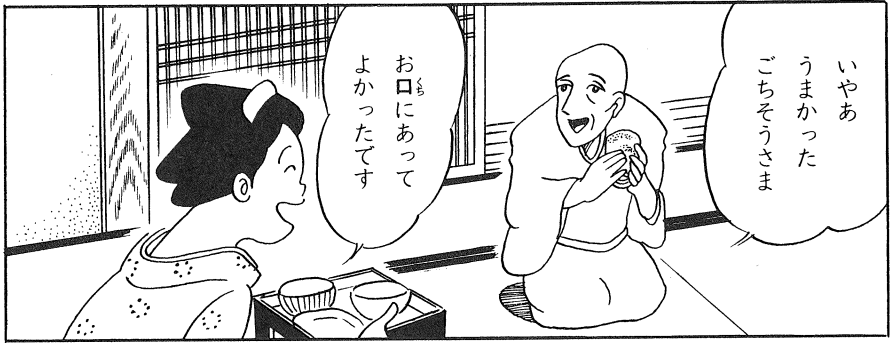
そして一具は
浄土宗名越派の教えを
骨の髄までしみこませた
還俗の坊さんでもあった。

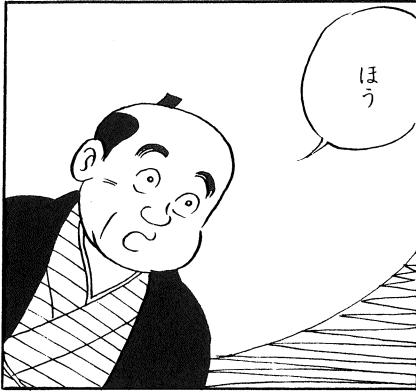


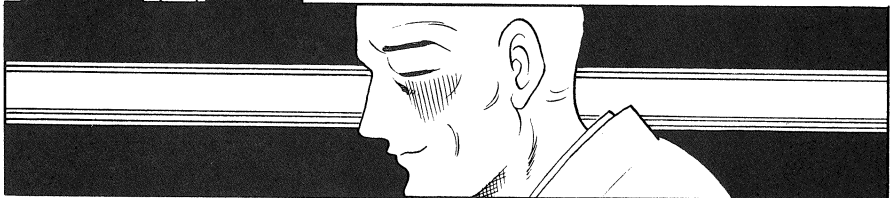
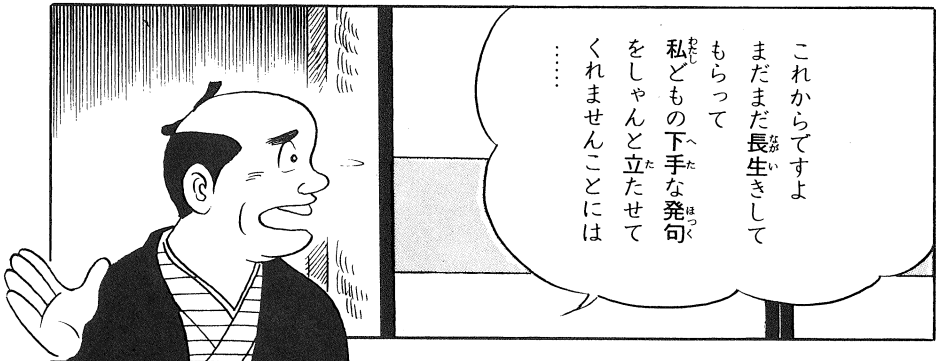
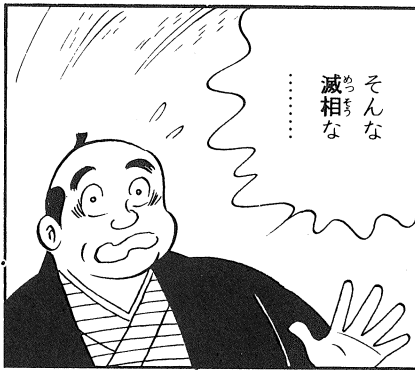
芦月



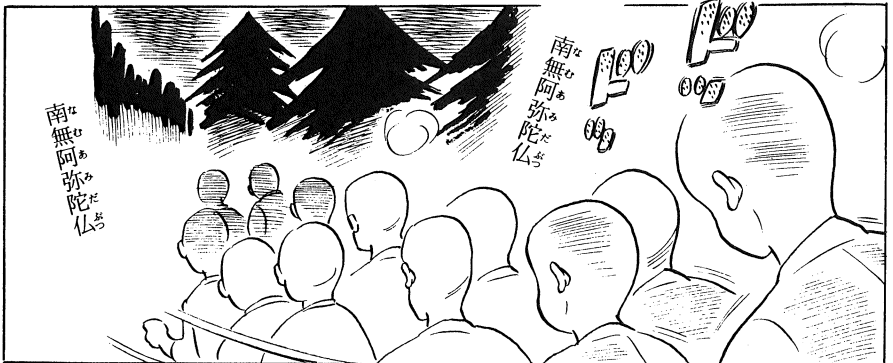
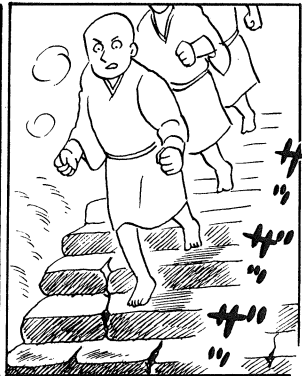


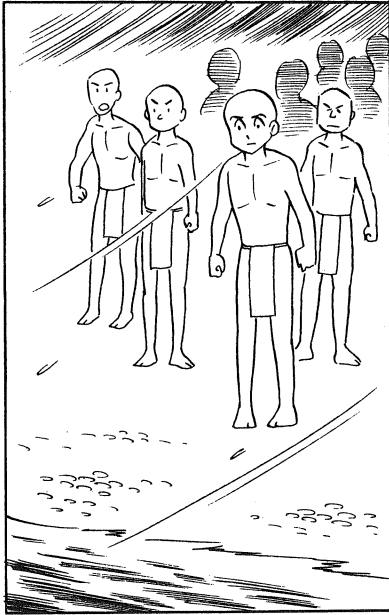






文化年間の初期
厳冬……

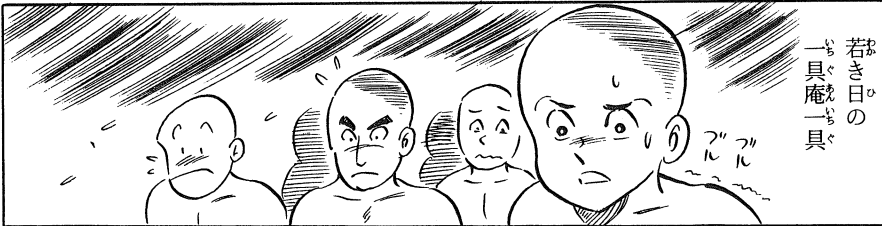




夏井川



夏井川



若き日の
一具庵一具



ハンニャー
ハーラーミータ



ナカ

ひ



生まれ故郷
出羽国で
そして、
青年期を過した
陸奥国で、一具は
優れた坊さんにな
るため荒行、勉強
を続けた。

こんな中で
一具には心を解き
放つひとときが
あった……

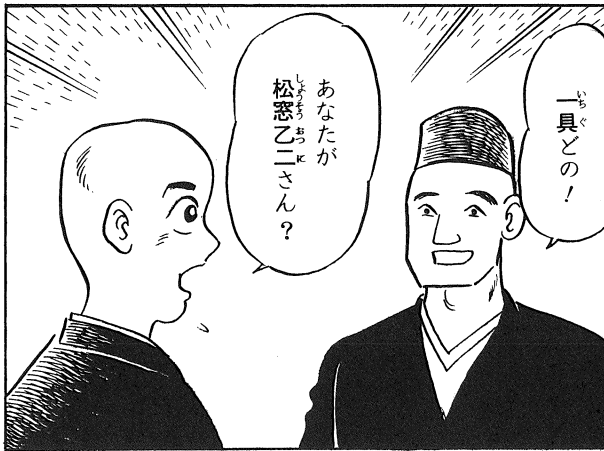


独学だが五七五の
俳諧を学ぶことが
大きな楽しみとな
った。



出羽・本覚寺に
預けられていた頃
少年一具は俳諧を知った。

俳諧？



「奥州俳壇四天王」の一人
伊達白石の松窓乙二との
出会いがのちの俳諧師
としての一具の人生を決める。

一具は乙二と連れ立って
俳諧の旅に出た。
もちろん修業の合間を
ぬってのことである。
文化十二年
乙二の門人である須賀川の
市原たよ女を訪ね
三人で歌仙を巻いた。
「夢南法師（一具の俳号）とともに石住といふ
奥山家にやどりて」と乙二が書きして
皂角の花の香をのみ吹あらし 乙二
明やすき夜を水のせゝらぎ 夢南
番鍛治のかはるゝにとの居して たよ女



浄土の教えを

およそ二十年学び、

俳諧の腕も上げた一具は、

文政二年

福島大円寺の住職に

就いた。

時に一具三十九歳。

だが、いつかいの

住職として終わる

にはあまりに大きく

一具の心に俳諧の

思いが巣食っていた。

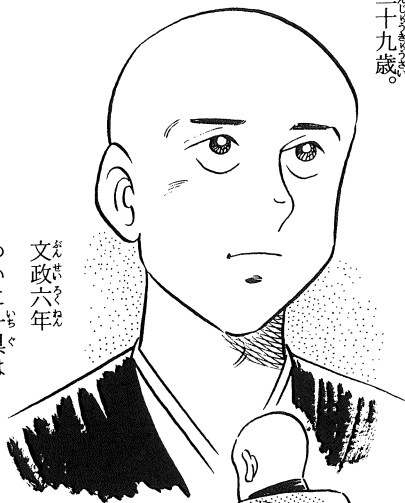
職業俳人として

立つべく江戸へ上った。

江戸では無名だったが

北日本には多くの門弟が

いた。



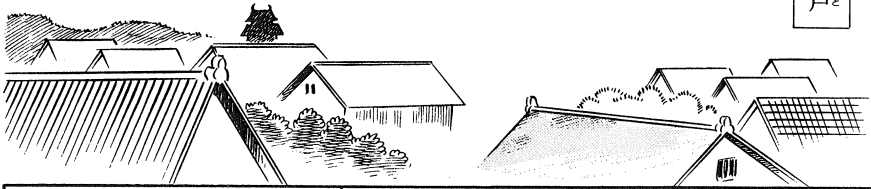
文政六年

ついに一具は

大円寺の住職を

後輩の坊さんにゆずり





ちと家を
たずねたい

この辺に
一具先生が
住んでいるはず
だが
知らんかね？



へえ
信州の生まれで

こんなやりとりが
あってようやく
江戸っ子の間にも
一具の名が知れ渡
るようになった。



一具？
知りませんね



知らんだと？
高名な俳諧の
先生を知らんとは
田舎者が

天保期以後の俳諧は、のちに正岡子規によつて、「月並俳諧」なる言葉でその文学的な退廃を攻撃された。確かに、爆発的に増えた俳諧人口をいことに、それに迎合する俳諧宗匠が多^く出^た。

だが、一具はかろうじて「温雅清純」な句を多く残している。

それを可能にしたのは、宗^{しゆ}教^{きやう}家^かとしてのストインズムであつたろう。

子規は月並俳諧のなかでも、一具の「はちたたき雪はしまくに西へゆく」の句を高く評価している。

俳諧師として名を成しながらも一具は名越派の一念業成などの教えを終生忘れることはなかつた。

常総へ、磐城へ、須賀川へ、福島へ、出羽国へ、一具はたびたび出向いて、かの地の遊俳を指導した。



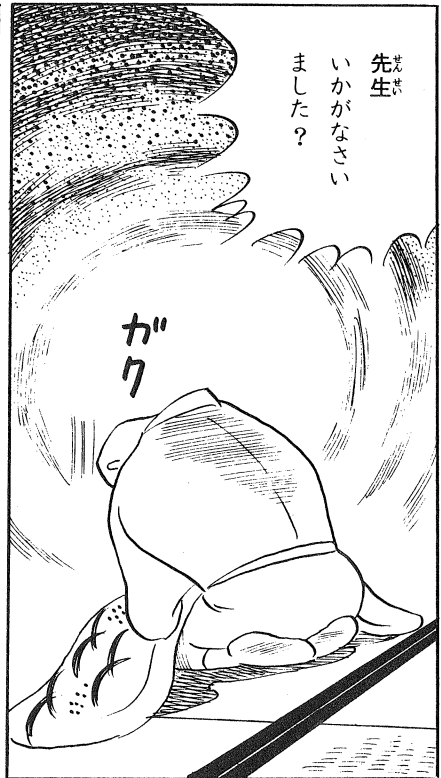
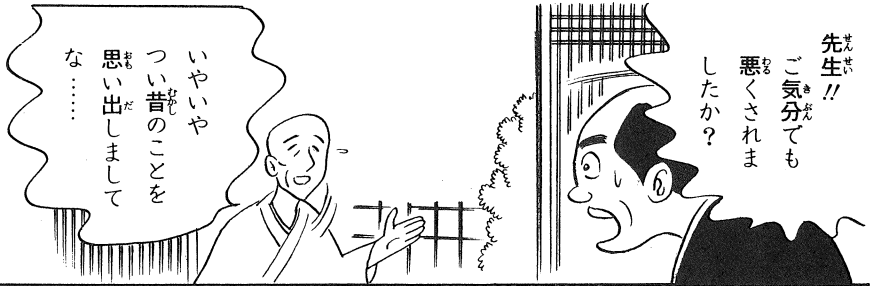
わたしには浄土の教えがあつた。俳諧に情熱をかたむけても、どこか心にすさま風が吹いていた。

その冷たい風を遮ってくれたのが、今は亡き専称寺貫主良孔上人だつた。

仏様をしようていたからこそ、遊俳にこびて自分を安売りして、俳諧の毒をたっぷり体にしみこませるまでにはならなかつたのだと思う。

今は、仏俳両道をまがりなりにも生きたことを、幸せだと思わねばなるまい。





一具の最後は、あつけなくやってきた。
一気に生から死へと飛び立ってしまった。
嘉永六年十一月十七日、一具没、享年七十三歳。
深川・靈巖寺に埋葬された。

名越派の教えに忠実だった
一具の死を惜しみ、専称寺
も、また歴代住職の墓の一
角に、分骨埋葬を許したと
いう。

専称寺の過去帳には、「十
一月十七日」の欄に、「開蓮
社良道悦應一具老和尚」と
記されている。

名刹は、今歴史の霧の彼方に消えてしまった
かのように見える。

だが、昭和六十年、県の史跡に指定され、改め
てその価値が見直されようとしている。

